

父

太宰治

青空文庫



イサク、父ちちアブラハムにかた語りて、

父ちちよ、と曰いふ。

彼かれ、答こたへて、

子こよ、われ此こゝにあり、

といひければ、

——創世記二十二ノ七

義のために、わが子を犠牲にするという事は、人類がはじまって、すぐその直後に起つた。信仰の祖といわれているアブラハムが、その信仰の義のために、わが子を殺そうとした事は、旧約の創世記に録されていて有名である。

エホバ、アブラハムを試みんとて、

アブラハムよ、

と呼びたまふ。

アブラハム答へていふ、

われここにあり。

エホバ言ひたまひけるは、

汝なんじの愛する独子ひとりご、すなはちイサクを携たずさへ行き、かしこの山の頂きおひに於て、イサクを燔は祭んさいとして献ささぐべし。

アブラハム、朝つとに起きて、その驢馬ろばに鞍くらを置き、愛するひとりごイサクを乗せ、神のおのれに示したまへる山の麓ふもとにいたり、イサクを驢馬よりおろし、すなはち燔祭たきぎの柴薪たきぎをイサクに背負はせ、われはその手に火と刀を執とりて、二人ともに山をのぼれり。

イサク、父アブラハムに語りて、

父よ、

と言ふ。

彼、こたへて、

子よ、われここにあり、

といひければ、

イサクすなはち父に言ふ、

火と柴薪たきぎは有り、されど、いけにへの小羊は何処いずこにあるや。

アブラハム、言ひけるは、

子よ、神みづから、いけにへの小羊を備へたまはん。

斯かくして二人ともに進みゆきて、遂ついに山のいただきに到れり。

アブラハム、壇を築き、柴薪をならべ、その子イサクを縛りて、之これを壇の柴薪の上に置のせたり。

すなはち、アブラハム、手を伸べ、刀を執りて、その子を殺さんとす。

時に、エホバの使者、天より彼を呼びて、

アブラハムよ、

アブラハムよ、

と言へり。

彼言ふ、

われ、ここにあり。

使者の言ひけるは、

汝の手を童子わらわより放て、

何をも彼に為すべからず、

汝はそのひとりごをも、わがために惜まざれば、われいま汝が神を畏るるを知る。

云々うんぬん

アブラハムは、信仰の義ただしきもの者たる事を示さんとして躊躇ちゅうちよせず、愛する一人息子を殺そうとしたのである。

洋の東西を問わず、また信仰の対象の何たるかを問わず、義の世界は、哀かなしいものである。

佐倉宗吾郎一代記という活動写真を見たのは、私の七つか八つの頃の事であったが、私はその活動写真のうちの、宗吾郎の幽霊が悪代官をくるしめる場面と、それからもう一つ、雪の日の子わかれの場を、いまでも忘れずにいる。

宗吾郎が、いよいよ直訴じきそを決意して、雪の日に旅立つ。わが家の格子窓こうしまどから、子供らが顔を出して、別れを惜しむ。ととさまえのう、と口々に泣いて父を呼ぶ。宗吾郎は、笠かさで自分の顔を覆うて、渡し舟に乗る。降りしきる雪は、吹雪ふぶきのようである。

七つ八つの私は、それを見て涙を流したのであるが、しかし、それは泣き叫ぶ子供に同情したからではなかった。義のために子供を捨てる宗吾郎のつらさを思つて、たまらなく

なつたからであつた。

そうして、それ以来、私には、宗吾郎が忘れられなくなつたのである。自分がこれから生き伸びて行くうちに、必ずあの宗吾郎の子別れの場のような、つらくてかなわなない思いをする事が、二度か三度あるに違いないという予感がした。

私のこれまでの四十年ちかい生涯に於いて、幸福の予感ほ、たいていはずれるのが仕来りになつてゐるけれども、不吉の予感ほことごとく當つた。子わかれの場も、二度か三度、どころではなく、この数年間に、ほとんど一日置きくらいに、実にひんぱんに演ぜられて來てゐるのである。

私さえいなかつたら、すくなくとも私の周囲の者たちが、平安に、落ちつくようになるのではあるまいか。私はことし既に三十九歳になるのであるが、私のこれまでの文筆に依つて得た収入の全部は、私ひとりの遊びのために浪費して來たと言つても、敢えて過言ではないのである。しかも、その遊びというのは、自分にとつて、地獄の痛苦のヤケ酒と、いやなおそろしい鬼女とのつかみ合ひの形に似たる浮氣であつて、私自身、何のたのしいところも無いのである。また、そのような私の遊びの相手になつて、私の饗<sup>きやう</sup>応<sup>おう</sup>を受け<sup>う</sup>ける知人たちも、ただはらはらするばかりで、少しも楽しくない様子である。結局、私は私

の全収入を浪費して、ひとりの人間をも楽しませる事が出来ず、しかも女房が七輪しちりん一つ買つても、これはいくらだ、ぜいたくだ、とごごとを言う自分勝手の亭主なのである。よろしくないのは、百も承知である。しかし私は、その癖を直す事が出来なかつた。戦争前もそうであつた。戦争中もそうであつた。戦争の後も、そうである。私は生れた時から今まで、実にやつかいな大病にかかつているのかも知れない。生れてすぐにサナトリウムみたいなところに入院して、そうして今日まで充分の療養の生活をして来たとしても、その費用は、私のこれまでの酒煙草の費用の十分の一くらいのものかも知れない。実に、べらぼうにお金のかかる大病人である。一族から、このような大病人がひとり出たばかりに、私の身の者たちは、皆瘦やせて、一様に少しずつ寿命をちぢめたようだ。死にやいいんだ。つまらんものを書いて、佳作だの何だのと、軽薄におだてられたばかりに、身の者の寿命をちぢめるとは、憎みても余りある極悪人ではないか。死ね！

親が無くても子は育つ、という。私の場合、親が有るから子は育たぬのだ。親が、子供の貯金をさえ使い果している始末なのだ。

炉辺の幸福。どうして私には、それが出来ないのだろう。とても、いたたまらない気がするのである。炉辺が、こわくてならぬのである。



午後三時か四時頃、私は仕事に一区切りをつけて立ち上る。机の引出しから財布を取り出し、内容をちらと調べて懐にいれ、黙つて二重廻しを羽織つて、外に出る。外では、子供たちが遊んでいる。その子供たちの中に、私の子もいる。私の子は遊びをやめて、私のほうに真正面を向いて、私の顔を仰ぎ見る。私も、子の顔を見下す。共に無言である。たまに私は、袂からハンケチを出して、きゅつと子の涙を拭いてやる事もある。そうして、さつさと私は歩く。子供のおやつ、子供のおもちや、子供の着物、子供の靴、いろいろ買わなければならぬお金を、一夜のうちに紙屑の如く浪費すべき場所に向つて、さつさと歩く。これがすなわち、私の子わかれの場なのである。出掛けたらさいご、二日も三日も帰らない事がある。父はどこかで、義のために遊んでいる。地獄の思いで遊んでいる。いのちを賭けて遊んでいる。母は観念して、下の子を背負い、上の子の手を引き、古本屋に本を売りに出掛ける。父は母にお金を置いて行かないから。

そうして、ことしの四月には、また子供が生れるという。それでなくても乏しかつた衣類の、大半を、戦火で焼いてしまったので、こんど生れる子供の産衣やら蒲団やら、おしめやら、全くやりくりの方法がつかず、母は呆然として溜息ばかりついている様子であるが、父はそれに気附かぬ振りしてそそくさと外出する。

ついさつき私は、「義のために」遊ぶ、と書いた。義？ たわけた事を言つてはいけない。お前は、生きてゐる資格も無い。放埒病ほうらつびょうの重患者に過ぎないではないか。それをまあ、義、だなんて。ぬすびとたけだけしいとは、この事だ。

それは、たしかに、盗人の三分さんぶの理にも似ているが、しかし、私の胸の奥の白絹に、何やらこまかい文字が一ぱいに書かれている。その文字は、何であるか、私にもはっきり読めない。たとえば、十匹の蟻ありが、墨汁の海から這はい上つて、そうして白絹の上をかさかさと小さい音をたてて歩き廻り、何やらこまかく、ほそく、墨の足跡をえがき印し散らしたみたいな、そんな工合いの、幽かすかな、くすぐつたい文字。その文字が、全部判読できたならば、私の立場の「義」の意味も、明白に皆に説明できるような気がするのだけれども、それがなかなか、ややこしく、むずかしいのである。

こんな譬喩ひゆを用いて、私はごまかそうとしてゐるのでは決してない。その文字を具体的に説明して聞かせるのは、むずかしいのみならず、危険なのだ。まかり間違まちがうと、鼻持ちならぬキザな虚栄の詠歎ぎんげんに似るおそれもあり、または、呆あきれるばかりに凶ずうずう々しい面つらの皮千枚張りの詭弁ぎべん、または、淫祠邪教いんしのお筆先、または、ほら吹き山師の救国政治談にさえ墮おする危険無しとしない。

それらの不潔な風と、私の胸の奥の白絹に書かれてある蟻の足跡のような文字とは、本質に於いて全く異なるものであるという事には、私も確信を持っているつもりであるが、しかし、その説明は出来ない。また、げんざい、しようとも思わぬ。キザな言い方であるが、花ひらく時節が来なければ、それは、はつきり解明できないもののようにも思われる。

ことしの正月、十日頃、寒い風の吹いていた日に、

「きょうだけは、家において下さらない？」

と家の者が私に言った。

「なぜだ。」

「お米の配給があるかも知れませんか。」

「僕が取りに行くのか？」

「いいえ。」

家の者が二、三日前から風邪をひいて、ひどいせきをしているのを、私は知っていた。その半病人に、配給のお米を背負わせるのは、むごいとも思ったが、しかし、私自身である配給の列の中にはいるのも、頗るたいぎなのである。

「大丈夫か？」

と私は言った。

「私がまいりますけど、子供を連れて行くのは、たいへんですから、あなたが家にいらして、子供たちを見ていて下さい。お米だけでも、なかなか重いんです。」

家の者の眼には、涙が光っていた。

おなかにも子供がいるし、背中にひとりおんぶして、もうひとりの子の手をひいて、そうして自身もかぜ気味で、一斗ちかいお米を運ぶ苦難は、その涙を見るまでもなく、私にもわかつている。

「いるさ。いるよ。家にいるよ。」

それから、三十分くらい経って、

「ごめん下さい。」

と玄関で女のひとの声が出て、私が出て見ると、それは三鷹みたかの或るおでんやの女中であつた。

「前田さんが、お見えになつていますけど。」

「あ、そう。」

部屋の出口の壁に吊り下げられている二重廻しに、私はもう手をかけていた。

とつきに、うまい嘘うそも思いつかず、私は隣室の家の者には一言も、何も言わず、二重廻しを羽織つて、それから机の引出しを掻かきまわし、お金はあまり無かったので、けさ雑誌社から送られて来たばかりの小為替こがわせを三枚、その封筒のまま二重廻しのポケットにねじ込み、外に出た。

外には、上の女の子が立っていた。子供のほうで、間の悪まそうな顔をしていた。

「前田さんが？　ひとりで？」

私はわざと子供を無視して、おでんやの女中にたずねた。

「ええ。ちよつとでいいから、おめにかかりたいって。」

「そう。」

私たちは子供を残して、いそぎ足で歩いた。

前田さんとは、四十を越えた女性であった。永い事、有楽町の新聞社に勤めていたという。しかし、いまは何をしているのか、私にもわからない。そのひとは、二週間ほど前、年の暮に、そのおでんやに食事をしに来て、その時、私は、年少の友人ふたりを相手に泥で酔いすいしていて、ふとその女のひとに話しかけ、私たちの席に参加してもらって、私はそのひとと握手をした、それだけの附合いしか無かったのであるが、

「遊ぼう。これから、遊ぼう。大いに、遊ぼう。」

と私とそのひとに言った時に、

「あまり遊べない人に限って、そんなに意気込むものですよ。ふだんケチケチ働いてばかりいるんでしよう？」

とそのひとが普通の音声で、落ちついて言った。

私は、どきりとして、

「よし、そんならこんど逢った時、僕の徹底的な遊び振りを見せてあげる。」

と言ったが、内心は、いやなおばさんだと思った。私の口から言うのもおかしいだろうが、こんなひとこそ、ほんものの不健康というものではなからうかと思った。私は苦悶くもんの無い遊びを憎悪する。よく学び、よく遊ぶ、その遊びを肯定する事が出来ても、ただ遊ぶひと、それほど私をいらいらさせる人種はいない。

ばかな奴だと思った。しかし、私も、ばかであった。負けたくなかった。偉そうな事を言ったって、こいつは、どうせ俗物に違いないんだ。この次には、うんと引っぱり歩いて、こづきまわして、面皮をひんむいてやろうと思った。

いつでもお相手をするから、気のむいたときに、このおでんやに来て、そうして女中を

使つて僕を呼び出さない、と言つて、握手をしてわかれたのを、私は泥酔していても、忘れてはいなかつた。

と書けば、いかにも私ひとり高潔の、いい子のようになつてしまふが、しかし、やつぱり、泥酔の果の下等な薄汚いお色気だけのせいであつたのかも知れない。謂わば、同臭相寄るといふ醜怪な凶に過ぎなかつたのかも知れない。

私は、その不健康な、悪魔の許もとにいそいで出掛けた。

「おめでどう。新年おめでどう。」

私はそんな事を前田さんに、てれ隠しに言つた。

前田さんは、前は洋装であつたが、こんどは和服であつた。おでんやの土間の椅子に腰かけて、煙草を吸つていた。痩せて、背の高いひとであつた。顔は細長くて蒼白く、おしろいも口紅もつけていないようで、薄い唇は白く乾いている感じであつた。かなり度の強い近眼鏡をかけ、そうして眉間みけんには深い縦皺たてしわがきざまれていた。要するに、私の最も好かない種属の容色であつた。先夜の酔眼には、も少しましなひとに見えたのだが、いま、しらふでまともに見て、さすがにうんざりしたのである。

私はただやたらにコップ酒をあおり、そうして、おもに、おでんやのおかみや女中を相

手におしやべりした。前田さんは、ほとんど何も口をきかず、お酒もあまり飲まなかった。「きようは、ばかに神妙じやありませんか。」

と私は実に面白くない気持で、そう言ってみた。

しかし、前田さんは、顔を伏せたまま、ふんと笑っただけだった。

「思い切り遊ぶという約束でしたね。」と私はさらに言った。「少し飲みなさいよ。こないだの晩は、かなり飲みましたね。」

「昼は、だめなんですの。」

「昼だって、夜だって同じ事ですよ。あなたは、遊びのチャンピオンなんでしょう?」

「お酒は、プレイのうちにはいりませんわ。」

と小生意気な事を言った。

私はいよいよ興覚めて、

「それじゃ何がいいんですか? 接吻せつぷんですか?」

色婆め! こつちは、子わかれの場まで演じて、遊びの附合いをしてやっているんだ。

「わたくし、帰りますわ。」女はテーブルの上のハンドバッグを引き寄せ、「失礼しました。そんなつもりで、お呼びしたのでは、……。」と言いかけて、泣き面つらになった。



それは、実にまずい顔つきであった。あまりにまずくて、あわれであった。

「あ、ごめんなさい。一緒に出ましょう。」

女は幽かすかに首肯うなずき、立つて、それから、はなをかんだ。

一緒に外へ出て、

「僕は野蛮人でね、プレイも何も知らんですよ。お酒がだめなら、困ったな。」  
なぜこのまますぐに、おわかれが出来ないのだろう。

女は、外へ出ると急に元気になつて、

「恥をかきましたわ。あそこのおでんやは、わたくし、せんから知っているんですけど、きょう、あなたをお呼びしてつて、おかみさんにたのんだら、とてもいやな、へんな顔をするんですもの。わたくしなんかもう、女でも何でも無いのに、いやあねえ。あなたは、どうなの？ 男ですか？」

いよいよキザな事を言う。しかし、それでも私は、まださよならが言えなかった。

「遊びましょう。何かプレイの名案が無いですか？」

と、気持とまるで反対の事を、足もとの石ころを蹴けつて言った。

「わたくしのアパートにいらつしやいませんか？ きょうは、はじめから、そのつもりでい

たのよ。アパートには、面白いお友達がたくさんいますわ。」

私は憂鬱ゆううつであった。気がすすまないのだ。

「アパートに行けば、すばらしいプレイがあるのですか？」  
くすと笑って、

「何もありませんわ。作家って、案外、現実家なのねえ。」

「そりや、……」

と私は、言いかけて口を噤つぶんだ。

いた！ いたのだ。半病人の家の者が、白いガーゼのマスクを掛けて、下の男の子を背負い、寒風に吹きさらされて、お米の配給の列の中に立っていたのだ。家の者は、私に気づかぬ振りをしていたが、その傍に立っている上の女の子は、私を見つけた。女の子は、母の真似まねをして、小さい白いガーゼのマスクをして、そうして白昼、酔ってへんなおばさんと歩いている父のほうへ走って来そうな気配を示し、父は息の根のとまる思いをしたが、母は何気無さそうに、女の子の顔を母のねんねこの袖そでで覆おおいかくした。

「お嬢さんじゃありません？」

「冗談じゃない。」

笑おうとしたが、口がゆがんだだけだった。

「でも、感じがどこやら、……」

「からかつちやいけない。」

私たちは、配給所の前を通り過ぎた。

「アパートは？ 遠いんですか？」

「いいえ、すぐそこよ。いらして下さる？ お友達がよろこぶわ。」

家のお金置いて来なかったが、大丈夫なのかしら。私はあぶらあせ脂汗を流していた。

「行きましょう。どこか途中に、ウイスキーでも、ゆずつてくれる店が無いかな？」

「お酒なら、わたくし、用意してありますわ。」

「どれくらい？」

「現実家ねえ。」

アパートの、前田さんの部屋には、三十歳をとうに越えて、やはりどうにも、まともでない感じの女が二人、あそびに来ていた。そうして色気も何もなく、いや、色気におびえて発狂気味、とでも言おうか、男よりも乱暴なくらいの態度で私に向って話しかけ、また女同士で、哲学だか文学だか美学だか、なんの事やら、まるでちつともなっていない、阿あ

呆ほくさい限りの議論をたたかわすのである。地獄だ、地獄だ、と思いながら、私はいい加減のうけ応えをして酒を飲み、牛ぎゆうなべ鍋をつつき散らし、お雑煮ぞうじを食べ、こたつにもぐり込んで、寝て、帰ろうとはしないのである。

義。

義とは？

その説明は出来ないけれども、しかし、アブラハムは、ひとりごを殺さんとし、宗吾郎は子わかれの場を演じ、私は意地になって地獄にはまり込まなければならぬ、その義とは、義とは、ああやりきれない男性の、哀しい弱点に似ている。

## 青空文庫情報

底本：「太宰治全集9」ちくま文庫、筑摩書房

1989（平成元）年5月30日第1刷発行

1998（平成10）年6月15日第5刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版太宰治全集」筑摩書房

1975（昭和50）年6月～1976（昭和51）年6月発行

入力：柴田卓治

校正：かとうかおり

2000年1月23日公開

2005年11月6日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

父  
太宰治

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>